

竹とこ

平成七年立机文集

猫蓑会



平成七年五月十七日

平成七年立机式特集

目次

祝 辞	東 明雅	1
百韻 今年竹	猫蓑連衆	上月淳子担当 2
梓庵哲宗匠	歌仙 春障子	4
	賛	中川 凡 5
一穂庵啓世宗匠	歌仙 駘蕩と	6
	賛	森川 昭 7
涼月庵あかり宗匠	歌仙 春の雪	8
	賛	二村 文人 9
房連庵麻子宗匠	歌仙 冴返る	10
	賛	高瀬 美保 11
緑華亭孝子宗匠	歌仙 多摩郡	12
	賛	大窪 瑞枝 13
梅香庵久美子宗匠	歌仙 白き鳩	14
	賛	金久保淑子 15
久慈庵弘子宗匠	歌仙 金縷梅や	16
	賛	山田みづえ 17
祝立机七宗匠	秋元 正江・式田 和子	18
謝 辞	中川 哲 中島 啓世 中田あかり	19
	内田 麻子 坂本 孝子 副島久美子	22
	市野沢弘子	
立机式プログラム	七宗匠住所電話番号一覧	23・24

平成七年猫蓑会立机式

祝 辞 東 明 雅

このたび立机をされる中川哲(梓庵)・中島啓世(一穂庵)・中田あかり(涼月庵)・内田麻子(房連庵)・坂本孝子(緑華亭)・副島久美子(梅香庵)・市野沢弘子(久慈庵)、七名の皆さん、おめでとう存じます。

多年、研鑽の甲斐あって、それぞれ宗匠としての名誉ある称号と地位を獲得されたこと満足はいかがでしょう。私としても、このことにより純正な俳諧を世に弘め、また、われわれ猫蓑会の発展に寄与して下さる方を七名も得たということは、まことに心強く最高のよろこびであります。

そもそも、この立机・庵号授与ということは、芭蕉以来の俳諧の伝統を完全に会得・消化したことを前提とし、その上、皆さんの人柄・資質を勘案して、而後、

宗匠として、伝統を守るに十分と認めた人に限って授けるもので、決して私の門下にあった年数によって自動的に与えられるものではありません。それだけに皆さんは選びぬかれた存在であるとともに、私の皆さんにかける期待も大きいと申さねばなりません。

曾て、私は平成三年師走に、門下生から第一回の立机式を行ない、三名の方を選んで庵号を授与し、俳諧宗匠としての資格を認定致しました。ご存じの羅浮亭正江宗匠・桃径庵和子宗匠、そして昨秋惜しくも逝去された行々子庵杉堂宗匠の三方であります。この方々の宗匠としてのすばらしい活躍は皆さんもよく御存じの通りであります。

これらのことに思いを致し、新宗匠の皆さんもさらに研鑽を重ね、自重自愛、俳諧の新しい未来のため、また、われわれ猫蓑会の発展のため、先輩の三宗匠に負けぬ輝かしい成果をあげられて、期待に応えられるようお願い致す次第であります。

平成七年 立机式 百付廻し 今年竹 猫蓑会連衆 上月淳子 担当

日に新た日に日に新た今年竹

風の薫りてさやぐ山の辺
一息にビードロ細工吹くならん
鉢巻はづしつまむ羊羹
藩賢の廊優勝の額並べ
早く既舎を出たい馬たち
黒潮の沖に過ぎ月の光
秋の序曲に誰がタクト振る
手の捌き鏡にうつし阿波踊
望まれて嫁す嬰兒を連れ
睦言をおかめいんこが聞いてをり
ユトリロの絵の石の坂道
流行のシャブリいささか辛口で
太目の針に通す絹糸
家付の娘厄介婆となり
関西地産揺らす平成
月射して枯原の色変りける
塩引寿司に添へし割箸
御簾内の渡り拍子を渡し終へ
屋根開けられる外車注文
花埃まだ校長のお説教
老革命家揃ひメーデー
物おとに沢辺の雉はとびたちて

東 明雅
秋元 正江
式田 和子
米谷 貞子
山口 みづゑ
豊田 好敏
坂本 孝子
坂本 瑞枝
浦原 健悟
浅賀 淑代
雑賀 遊
鈴木 美奈子
中村 ふみ
穴沢 篤子
佐藤 良彌
市野 弘子
登坂 かりん
三浦 悟朗
北村 良輔
中川 哲
中川 凡
根津 芙紗

御隠居のそら耳が聞くほととぎす

白き帆を立てヨット数々
筑波山はるか彼方に浮び居り
まだまだ越せぬ十両の壁
健康が取得なだけの私です
光のシャワー浴びる菜園
フアーブルもシートンも好きママも好き
恋文つづり隠すひきだし
酔ひ心地観音菩薩おぼろなる
春泥はねてどこの車か
昼の月、フリーターになる」と卒業生
猫まで俺の膝をすりぬけ
長椅子に読みさし伏せる健三郎
鬱金の色に芝は枯れ枯れ
鹹あげて伊吹風の名古屋城
芸どころなる人は粋筋
再々に欧州旅行誘はれて
ペアルックにからむイニシャル
週末の寝覚ゆったりのびやかに
たまのひとり写真は写真帖くる
月の池み仏笑ます浄瑠璃寺
部にひしと縋る馬追
手すさびの瓢に目鼻描き入れて

峯田 智志
須田 よしえ
若尾 利子
梅田 治子
加藤 慶子
由川 志津枝
後藤 志津枝
岡本 道子
繁原 敏子
小園 好藍
矢崎 藍
月山 壹
下坂 元子
原田 千町
猪子 春治
武村 利子
細川 研三
山田 歌子
杉山 壽子
桑原 美津忠
東野 郁子
小宮 水壺
今宮 水壺

バーガー店で食べるきんぴら
セールスマン革の靴の重たげに
地獄の匂ひ天国の夢

兄の結婚なぜ私が淋しいの
ラスベガスには別の女と
手鎖は旅券の偽造にべもなし
家出の癖の直らない猫
いくとせも茶箱に眠る九谷焼
鑑定人の憎き眼力
入歯には純ブラチナと決めて居り
堅き木の実が大地穿ちて
三重の笠雲淡く月のぼる
窓辺にもたれ暮れて行く秋
鹿寄せの旅に奈良墨買ふならん
外国便に碑文法帖
橋長くさざ波立つる濁り河
カーステレオでマラーを聴く
マニキュアに細巻煙草くゆらせる
女課長にけふも誘はれ
湯上りの逞しき彼すがりつき
根切蟲が鉢にかかればい
仰ぎ見る青嶺にかかる鎌の月
西洋懐石シェフのご自慢
役員会為替円高忍の時
亥の子祭の守り札買ひ
振り向けば蕊のほのかな婦り花
隣組長挨拶に来て

岩井 啓子
村田 富美
眞山 光子
真出 きよみ
佐古 英子
松本 碧樹
青木 秀樹
鈴木 茂
逸見 篤
吉田 憲助
山口 美恵
杉内 徒司
水鳥 ますみ
下鉢 清子
遠藤 央子
橋本 文子
百武 冬乃
長崎 和代
加藤 道子
山崎 澄子
八角 澄子
副島 久美子
滝川 雅代
金久保 淑子
神谷 安子
中田 あかり
篠原 達子

名代の団子友の土産に

湯煙のたなびいて居り山の宿
思ひつきりにピッコロを吹く
人波に拳がる歓声滝花火
浴衣の袂吾兎に握らせ
金玉糖くずまんぢうの並ぶ店
消費税アップ弱者直撃
血筋よき犬にも此の身吠えられて
木乃伊となりし木乃伊とるひと
相場師の売買ひの齟齬紙一重
悪女と知れど凍宿に待つ
何も彼も撮られビデオの掛布團
風ひるがへす原の草波
避難所に安否尋ねてまた電話
豚汁つくるメリリヤン・ハラさん
縫ひ物に母はいつでも手をあげず
みとり疲れのふっと居眠り
弦月に溜息橋の灰白く
軍靴の響き霧深き中
筆まめな友でありけり頼祭忌
国語教師の音吐朗朗
人生を垣間見し間の八十路なり
はぎれで作る小さきクッション
豊漁の瀬渡し船の戻る海
霞わたれる伊豆の島々
濡れ縁のあやとりの子に花の降る
メッセージつけ上げる連風

近藤 守男
八代 和彌
権頭 麻子
内田 蓉子
五瀬 美保
高瀬 代々子
橋野 八重子
本田 景翠
岩垂 八重子
田村 満子
松田 多恵子
本屋 良子
榎 紀子
緒方 健子
高橋 豊美
稲葉 道子
若松 隆一
加藤 慶二
海野 慶二
木場 文夫
島村 暁己
中西 妙子
佐々木 有子
倉本 千雪
小林 千雪
中島 啓子
上月 淳子

春障子

梓庵

哲

捌

ことごとく開け放ちたり春障子
ほのかに梅の匂ふ坪庭
新しき桶に白魚汲みあげて
庖丁三代伝承の技

一筋の飛行機雲に昼の月
巡業相撲轍はためく
道祖神ふりかへりつつ牧閉す
会へば見ぬ日を思ふ哀しさ

じれつたいなぞそんなこといへないの
ファザコンマザコンチヂコンパバコン
葡萄酒と南蛮占酒を苞に買ひ
草稿了へて月に陶枕

腰壁にががんぼひたとはりつきて
瓦礫の街に視察統々
クレーンを大きく回すイラン人
マルチメディアにお手上げの輩

老の庵駮系とる花衣
蒲公英の絮ふはり飛びゆく
卒業期旅のプランは壮大に
ダイアナさんは唐突に来る

おしたちを借りたついでの立話
喧嘩だ半鐘だ草鞋っかけ

美保 和子 義夫 多恵子
保保 和子 義夫 多恵子

保保 和子 義夫 多恵子
保保 和子 義夫 多恵子

○ならば誰でも輸血消防士
並んで食べる山鯨鍋
ピチピチのギャルに目移りまた貴方
ゆるく噛まれた首筋の痕
こともなく樗大樹に風過ぎて
月の舟漕ぐ絵本児に読む
夢叶ひ芸術祭の賞をとり
不協和音の身に入みる頃
象使ひ油断ならぬと気を張りぬ
南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛
のど飴をいつもバッグに外出し
ショートホールの池にポッチャン
花の宴ひょっとこ面が暮もたげ
琴弾鳥の高らかに鳴く

平成七年二月十九日 首尾

於 三の会(桃径庵)

連衆 式田 和子 内田 麻子 高瀬 美保
松田 義夫 松田 多恵子

保保 和子 義夫 多恵子
保保 和子 義夫 多恵子



梓庵 哲 宗匠

本名 中川 哲

東京麴町生まれ。東京府立三商卒業。平成五年まで、(社)日本経士会東京支部長として活躍され、現在もなお各地の商工会議所などでの講演を続けている。

連句の道に入られたのは、府立三商時代からの終生の友であった故福井隆秀氏の後を追って昭和五十九年ACCに東明雅先生をたずね、門下生になったことに始まる。いまや、手薄である男性会員のリーダーとして、猫養会・猫養同人会の理事を勤められている。

哲 宗匠の連句席に一座させていただく、なんとなく江戸時代末期からの東京下町の雰囲気遊ばせてくださる。それもそのはず、哲宗匠のベースには幼少の頃からのお祖母様の薫陶により、芸好きオタクの気味がある。戦前の『都新聞』の切り抜きやら戦前の芝居のプログラムがあったりする。またご自身も東横素人名人会の舞台上上がって、義太夫語りとして聴衆を唸らせたこともあると聞く。平成三年の立机式には、実行委員長として式の運営をとりしきり、さらにご自身の義太夫で立机式のお祝いの席を盛りあげて下さった。

常日頃、酒をこよなく愛し、朝一杯のビールは欠かせないとおっしゃる。ご自宅ではほぼ和服。夏は浴衣で銭湯に行かれるのなどは、面目躍如。梓庵の由来は、哲宗匠の義太夫の芸名が中川梓であるところからお採りになったと聞く。

賢・梓庵 哲 宗匠

おやじさんの背中

中川 凡

我家には家訓、掟の類が見当たらない。しかも出入り飲食寝泊り自由なため、親戚縁者隣人友人海外留学生などが我物顔で父と酒を酌み交わしていたりする。そんな我家にひとつない物がある。風呂である。昔はあったらしいのだが、私が生まれるのを機に銭湯通いにしたという。「子供は銭湯で育てる」強いて言えば父の決めた唯一の掟であるらしい。そして私は銭湯において、隣で体を洗う他人様との関わりを覚え(熱い湯に我慢して入ればラムネを御馳走してくれるおじさんがいる事を知り)、社会のルールを学ばされて現在に至っている。ところで、銭湯で私は父の背中を流したことがない。銭湯における最もポピュラーで、ドラマ等の入浴シーンではよくあるこの親子の光景が、何故か苦手であり抵抗がある。照れくささもあるだろうし、連句で父と同じ座になるやりにくさにも似ている気がする。それって逆に言えば、親離れしていない証なんじゃないの?と思つた時、熱い湯舟にサッと入り、上がり湯を一杯かぶった父は「先出るよ」と言い残してとっとと上がって行くのだった。

駘蕩と 一穂庵啓世 捌

駘蕩と文台抜く八十路かな
 白木蓮の一穂の香
 大漁旗乗込みの鯛紅さして
 郵便配達遠会釈する
 夕月に背なの兎早も深眠り
 リース飾れる窓に楹棹
 やや寒の両室に彫塑続け居り
 脱いでも着ても麗はしの君
 朝歸り妻の恪氣は直下型
 予知連やめて既知連とする
 額づきて祈るマリヤは裾を引き
 カフェーテラスに憩ふひとびと
 椰子の葉を洩る月影に烏の子
 初蠲を聞きし裏庭
 井目に風りんつけていざ勝負
 コンピュータなみうちの僕ちゃん
 箱根路の宿に舞ひ込む花吹雪
 峰の茶店で茶飯田樂
 義土祭の墓前に漢詩吟じをり
 C・M稼ぐ映画俳優
 親方は日の丸なりと銀行屋
 サンドバッグを打って健やか

志げ子

啓世

文子

道子

南果

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

志文

チエホフ讀むベチカの前にサモアール
 あざらし乗りし氷ぶかぶか
 中将はひそかに媚薬買ひ求め
 几張のかけにころぶ冠
 ザッハトルテハブスブルク家御用達
 古城と共に「幽霊西へ」
 機窓より月の原野を見下ろして
 旧友の曲うそ寒の席
 留守居するうれし樂しきぬくめ酒
 備もほほ笑む午後のひとつき
 飼猫に犬の芸まで教へこみ
 世界平和は夢のまた夢
 爛漫と花紺碧の湖の上
 里の遠近囀りに満つ

平成七年二月二十三日

於 藤沢一穂庵

文 淑 道 文 道 南 道 同 道 志 南 志 文 南 道 啓 道

連衆 蒲原志げ子 金久保淑子 橋 文子
 井上南果 加藤道子



一穂庵啓世 宗匠

本名 中島 啓世

神戸生まれ。十歳のとき芦屋に転居。神戸女学院卒。俳句は山口誓子先生に昨年まで、約三十五年間師事してこられた。連句は岡田利兵衛先生の講義を聞いていたが、昭和五十三年の夏、東明雅先生に松本市でお会いしてから実作にはいり、昭和五十六年にACCの一期生として入会する。その後はご存じ猫養会員、猫養同人会員として現在にいたる。

啓世宗匠とうかがえば『旅』のことが話題の中心になるが、久松潜一氏が会長をされていた『日本文学風土学会』に二十三年間籍をおかれ、文学活動の一環として同会が企画する夏・冬の国内現地調査には殆ど出席してこられ、文学に関わる風土を、くわしい資料とともに尋ねることが楽しみであられるとか。

『旅』は国内にとどまらず諸外国あちらこちらに誓子先生のお供で出掛けられ、そのときのスナップ写真を明雅先生によくご覧にいられた。

庵号の『一穂庵』は漢詩の「寒灯一穂」からとられたもの。その意味は、時々油を注ぎ足しながら、連句の灯を湘南の片隅に点していきたいという願いからとのことである。

啓世宗匠の著作は、前記の風土学会の会報や『天狼』『鹿火屋』などにエッセイ等をお書きになった程度とうかがっている。

宗匠一穂庵

啓世宗匠に期待

森川 昭

(前東京大学教授)

昭和42年5月、当時私は愛知県知立市に住んでいて、八橋の杜若を見に来られた岡田利兵衛さん一行を御案内しました。その時中島さんに初めてお目にかかりました。それから私は東京に転居しましたが、神田の学生会館に岡田さんが来られるというので参上したら、そこで中島さんと再会しました。その後電話で楽しいお話をしたり、町田市でデートをしたり、長い御縁です。

中島さんの行動力には呆れるばかりです。日本武尊の杖衝坂、芭蕉鹿島詣の大儀寺、蕪村月夜の卯兵衛の九十九袋、宇治行の田原、興がわけば千里を遠しとせず、たとえ異国であろうと、飛んで行く、そして独創的な文章を書かれる。私などはその文章の跡を追って右往左往するばかりです。

中島さんはたしか八十二歳になられる筈ですが、ロシアの楽器バラライカや、漢詩の創作もお始めになる。お若い、お若い。

今度は俳諧の宗匠になられるという。まさにギネス・ブック的である。御活躍を楽しみにしています。

春の雪

涼月庵あかり 捌

汐さすは佃あたりや春の雪
 梅もほつほつ咲き初むる頃
 人学児バッチワークの母とみて
 コーヒー飲むかと三毛猫にきく
 織月の裏道湯の香出湯の町
 訪ふひとに爽籟の声
 コスモスに渾沌正す哲学者
 口論の果いつも口づけ
 小悪魔になりきるつもり紅をさす
 ストライキする舞妓芸妓も
 せせらぎを庭に引き入れ作り滝
 不如婦啼く寺の夕月
 歳時記をめぐってみれど句はならず
 オスカイ像を競賣に出し
 大地震揺れしは唯の十一秒
 そのひと言に心和みぬ
 ポトマック人種隔てず花の下
 ナオ 牛乳瓶にお玉杓子を
 菜飯茶屋旅の味はひ噛みしめて
 訛直す氣「違ふぞなもし」
 魍魎魍魎首相の眉をなでまはし
 SP ありがたいすす水漬

あかり 千恵子 和久 徒司 恵久 恵久 郁司 郁司 久司 久司 同郁 同郁 恵郁 恵久 司久

通勤車着ぶくれの胸模摺へる
 感じるころそっとノートに
 香水を変へて新たな恋始め
 釣った魚にせびる小遣ひ
 米あまりブレンド米よりブランド米
 耳打しきりすはや揉め事
 月さやか下天の夢を照らしだす
 ナ 揺れる糞虫誰を偲ぶか
 プラームス聞かせて醸すワイン蔵
 十字を切って祈るビショップ
 柔道着洗ひざらしがぬっと立ち
 山の如くに動かざる意志
 本丸の城壁花のしきりなり
 水筒持ちて遠足にゆく

平成七年二月五日

於 深川芭蕉記念館

連衆 東 郁子 鈴木千恵子 山田和久
 杉内 徒司

恵久 恵久 司久 司久 同郁 同郁 恵郁 恵久 司久



涼月庵あかり 宗匠
 本名 中田 政枝

東京生まれ。桜蔭高女、旧制実践女専(現実践女子大)国文科卒。昭和十八年、土屋文明氏に教科として短歌を習いしたときから、短詩型文学に強い魅力を感じ、昭和三十五年、ホトトギス系の俳句結社に入会。昭和四十九年、ACCで加藤楸邨先生の教室に学び、「寒雷」に入会する。俳句歴三十五年。昭和五十六年、ACCで東明雅先生の『連句の理論と実作』の講義が始まると、第一期生として入門し、今日に到る。涼月庵あかり宗匠の学生生活は、素晴らしい教授と才能溢れる友人に囲まれ、天国のようであったと述懐される。折口信夫先生のしみ通るようなお講義。高崎正秀先生はおおらかに新古今集を語り、武田祐吉先生、金田一京助先生、武島羽衣先生の講義を聞き、無欠席で学校に通われたとか。その良き時代の延長線上に、いまのACCでの涼月庵宗匠の熱意が伺える。
 平成元年、同人誌『文芸いたばし』を有志と創刊し、年に二回、小説を発表される。
 涼月庵の庵号は、お仲間から「あかりさんにぴったりの印象よ」と言われたので、抵抗なくいただいたとのこと。また、「あかり」という名前は昭和四十九年の沖繩旅行の帰路、飛行機から見た東京の夜景が素晴らしかったので、俳席で使うことにされたようだ。

黄・涼月庵あかり宗匠

付味は「響」

二村 文人
 (富山大学助教授)

よく地方から来た人が、東京は住みにくいと言う。けれども、それは本当の東京を知らないからだ。なるほど古き良き時代の東京は、すっかり姿を消してしまっただが、今も人の心の中に確かに生きています。あかりさんは、この頃では珍しくなりました神田の生まれだ。娘時代に、下谷の佐竹へ小間物や手芸品を買に行ったことを、目を輝かせて話してくださいました。生まれて初めてクリーム蜜豆を食べた店まで教わった。あかりさんをはじめ、猫糞の連衆には、私の母と同じ年輩の方が多い。正江さんには、上野広小路にあった水戸屋の茹小豆の話が聞いた。私の母は、渋谷駅でハチ公を見ている。私はそんな話が大好きだ。あかりさんの連句には、豊かな心ももっていた。東京の生活の記憶が流れているはずだ。
 あかりさんはいつも元気だ。立川談志を応援して、自宅まで電話をかけてしまう行動力がある。あかりさんと一緒に席になると、連衆の間にも活気が出る。付味と言うと「響」のような人だ。肩をすくめて、ちょっとはにかんだようなあかりさんの笑顔が美しい。

冴返る

房連庵麻子

捌

四つ角のひとつは湖へ冴返る
 公魚釣りの赤き天幕
 春の歌母さんと吹くハモニカに
 速達便で頼む新刊
 月光にしろき影置く萩・桔梗
 夜食のうどん連立ちて喰ふ
 秋祭御輿かつぎを生甲斐と
 おやお譲りで年上が好き
 羅の冷足細くかきあげて
 素描のモデル腰の太やか
 駅近く電車のゆるき高架音
 たまぶらーどてふ新しき街
 有明を仰ぎて帰る納め弥撒
 寒の鳥に声をかけつつ
 ロッキード主役不在で終結し
 乾杯をする小鬼大鬼
 淡墨の花びら髪に受けとめて
 虚子忌に配る和紙の短冊
 風車くるくる回れ乳母車
 明日は旅立ち犬はキャリリーに
 神経症・アレルギー症・心配症
 勇み足にて雑誌つぶれる

篤子 麻子 美保 紀子 ちづる 蓉子 智恵 澄子 淳子 紀子 篤子 同 澄子 同 紀子 蓉子 保子 篤子 ちづる

若後家は何時も取まき引きつれて
 嬢の性を知るや知らずや
 サングラス掛けて予期せぬ嘘を吐き
 モナコで挙げる金婚の式
 白き帆の次々窓をよぎりゆき
 地震の国に借さぬ名品
 薬王院月の不動をおろがみぬ
 きりぎりす来て早稲の穂を噛む
 ナウ 爺・婆が名残狂言泣かされて
 大工仕事に過す留守番
 お茶うけの羊羹厚く切りわけろ
 ファジーな挨拶蒙古より風
 送電線つなぐ山々花霞
 鄙の宿りに亀鳴くを聞く

恵 麻子 蓉子 恵 澄子 紀子 蓉子 麻子 保子 ちづる 紀子 恵

平成七年二月二十三日首尾

於 梶が谷房連庵

連衆 穴沢 篤子 高瀬 美保 椿 紀子
 山口 みづゑ 五味 蓉子 須田 智恵
 八角 澄子 上月 淳子 岩田 玲子



房連庵麻子 宗匠

本名 内田 和子

東京生まれ。しかし、ご本人は信州長野の善光寺門前町が故郷とおっしゃるくらい、長野への思い入れを強くお持ちである。東京都立第三高女卒業。終戦後に長野市で労働基準監督署や出版社に就職する。
 生来、短詩型文学に傾倒し、長野出身の歌人・斎藤史さん主宰の『原型』の同人となり、短歌を学ぶ。そのかわら、お仲間と中世の歌人や和歌、歌合せ、連歌を勉強し、心敬忌の集いで高藤馬山人氏を知り、連歌から連句の世界に興味をもった。
 昭和五十六年、朝日カルチャーセンターで東明雅先生の『連句の理論と実作』の講座が開かれて、第一期生として入門する。麻子というお名前は、短歌のときのペンネームである。麻子宗匠のお人柄はまず無類の勉強家で、連歌を研究してその挙げ句で連句に進まれたということからも、よくわかる。いまでも、そのころの参考書や資料などが整理されているが、それは戦中世代のひたむきさから逃れられないという。
 そして幅広いお友だちに恵まれていること。むなぐるま草紙社から発行された『房連庵の連句』を見舞うと驚くほどである。房連庵という庵号は、昭和六十年に逝去されたお父上のマンションの一室を釋房連（岩下房人）というお名前に因んで名付け、連句普及の場にしたと考えられたものとか。

黄・房連庵麻子宗匠

不思議な魅力

高瀬 美保 (猫衰会)

「ひとり短歌ばかり作っていないで、あなたも『座の文学』に加わりなさいヨ」との麻子さんの一言が、私と連句との縁の始まりでした。決して強制的ではないのに、いつの間にか彼女のペースに包み込まれてしまうといった感じは毎度の事。何とも不思議なお人柄、不思議な魅力の持ち主なのです。
 思えば麻子さんとは、セーラー服の女学生時代から約半世紀の長いお付き合いです。空襲下の東京で一緒に防空壕へ避難をした動員学徒の仲間が、いま歳時記を繰りつつ一座し、連句の世界に遊び得るしあわせ——。実に遙かな思いがいたします。さまざまな歳月を重ねて来た私達世代、その歳月を糧に人生の哀歓を折々に描いていけるといいですね。麻子さんはまた「一期一会」という言葉をよく口にされます。連句はまさに出会いの場。べたつかないお付き合いの中に何気なく思いやりを示し、真に一会の大切さを語るひと麻子さん。新宗匠に心から拍手し、立机式の御慶びを申し上げます。

多摩郡

緑華亭孝子

捌

梅にはふ造り酒屋も多摩郡
 背戸の小流れ早春の歌
 新入生答ふる声の凜として
 クオーツ時計日付あはせる
 名月に濡れたる街を視野の内
 壁やや寒く並ぶ油絵
 文化祭さても南京玉すだれ
 胸のヒューズの飛びし初恋
 身代の傾けばはや見限られ
 篠つく雨の降り暮らす庭
 乱世は好機と打って出る選挙
 鬼籍の人に下す判決
 蜘蛛の罫に鱗翅の彩の鮮やかに
 ワインゼリーに凝りし月光
 ケチャダンスリズムとり合ふ息の妙
 母のお守りひもで吊せし
 里の花波みてはこぼす水車
 東風吹きますと氣象予報士
 麻雀はつひに覚えず弥生忌
 ナオ
 グルメの猫の研いでゐる爪
 なめらかにロールスロイス滑りゆき
 半七つつあんと風呂桶の中

孝子 路子 好敏 瑞枝 健悟 達子 枝路 敏悟 悟路 敏枝 達枝 悟枝 敏枝 悟路 同達

淡路島更けて千鳥の共枕
 嘘をつくとき咳の出る癖
 転職の廻り廻って元の職
 毒矢の森にクマノミの棲む
 占ひのカードに笑ふされかうべ
 細巻煙草ふっとくゆらせ
 棟上の招待とどく三日の月
 ナ
 ちろ松虫今を盛りに
 高原に音数律の秋闌けて
 夢に別れの帽を振るなり
 名匠の作る針箱玉手箱
 お札を兼ねてチョコのトリュフを
 楊貴妃の花豊満に門跡寺
 雛の顔を包む薄様

平成七年二月二十四日首尾

於 緑華亭

連衆 倉本 路子 豊田 好敏 大窪 瑞枝
 佛洲 健悟 篠原 達子

達孝敏同枝達路敏枝悟路敏達路



緑華亭孝子 宗匠

本名 坂本 孝子

東京生まれ。都立八潮高校卒業。ACCで加藤楸邨先生の『芭蕉の美学』『俳句の実作』の指導を受け、その後俳誌『寒雷』に投句をつづける。
 昭和五十六年、朝日カルチャーセンターで東明雅先生の『連句の理論と実作』の講座が始まり、第一期生として入門し、現在にいたる。
 実作における緑華亭孝子宗匠の魅力は、お捌となられれば連衆を倦ますことなく、ぐいぐいとリードし「なるほど」「さすが」という一直をしていただけ。また、連衆となられての付け句は、平凡な何気ない文字や言葉が、あるときは珠玉のように、またあるときは両刃の短刀のように輝くから不思議である。その発想の見事さは明雅先生らの編集された『連句辞典』、近代連句入門の手引きのTさんこそ孝子宗匠であり、これによって連句の世界に迷い込まれた方は少なくないと思う。

緑華亭とは、孝子宗匠の母上のお住まいで、その命名は三年まえに明雅先生からいただいたとか。まさに「華」という字にふさわしい、豪華絢爛な作品が孝子宗匠にはお似合いである。孝子宗匠の表芸ともいべき観世流謡曲と仕舞、それに緑華亭での月一回の連句興行、これこそがその若さと活力の源泉ではあるまいか。

黄・緑華亭孝子宗匠

介護の日々の孝子さん

大窪 瑞枝 (猫養会)

孝子さんが母上を介護されるようになったのは何時の頃からだったろうか。僅かの隙に見えなくなった母上の行方を夜っぴて捜したり、昼夜のリズムもなく老いの思い込みを言い募る人に抗ってへとへとになるまで諍ったことなど幾度嘆かれたことか。彼女は一時退いてやり過ぎすということの出来ない人だった。介護は行き届き、時に凄絶でさえあった。その情の濃さが彼女の抜群の仕事能力と結びつく時、無類の親切となって人を感動させる。ジャージー姿で無心に微笑んでいられる母上を預ける先もまま車に乗せて私の長唄の会に連れていらしたことが忘れられない。一方その情は加減知らずの舌鋒となって人を当惑させたことも事実だった。

孝子さんの卓抜な連句の力は誰しも認める所だったが猫養の活動の中心に携わることは少なかった。漸く良い施設を探し当て母上を託された今、時熟してこの度の宗匠立机とはなった。「猫養」という宝冠を飾るダイヤの中でも格別大粒な一顆として輝くのである。それこそ孝子さんの本来置かれるべき場所であった。

白き鳩 梅香庵久美子 捌

白き鳩翔び立つ空の淑気かな
若潮迎へ落行く人
大籠に甘だいだいを盛り上げて
ワープロ習ふ暖かな縁
啓蟄の土ほっこりと月昇る
火入れのすみし山裾の窓
新市長文化会館もて余し
髪くしけづる軟派少年
妻でないひとを隣にオーブンカー
金魚繚乱ニューハーフ抱く
奥蟻蛾に女流作家の棲みつきて
葉に採りし茯苓の嵩
月細る行草いまだ道遠く
涙ながらの名残狂言
さきいかをつまみつつ干すカップ酒
猫を呼び合ふ兄と妹
外つ国へ花の使節を送り出し
レガッタ予選又も勝ち抜く
おはあはと初虹かかるビル狭間
落首めきたる塀のいたづら
しゃらくせえ写楽の謎に迫りたき
思ひ出せない揺り椅子の夢

久美子 清子 文子 雅代 和代 澄子 志げ子 清 文 清 和 代 文 代 文 清 和 澄 文 志 和 澄 文 志 清 文

クリスマス鈴を鳴らして橋が行く
採氷夫にも団欒の刻
妖精と見まがふ程の肌を賞で
アंकレットの脚からませる
寝転んで「鍵」読み耽る四疊半
捨てし小舟に柳散る月
グルメ旅集ふシルバー地蜂焼
傷負ふ猪を放し飼ひして
縄文の遺跡を掘るは小さき筆
講師先生左利きなり
集音機思ひがけなく拾ふ音
一円玉のたまるポケット
名刺の花も盛りに紅しだれ
友とくつろぐ春灯の下
平成七年一月十一日

於 源心庵

連衆 下鉢 清子 橋 文子 滝川 雅代
長崎 和代 八角 澄子 蒲原 志げ子

澄代 志和 志和 澄清 和志 澄代 澄文 美代



梅香庵久美子 宗匠
本名 副島久美子

東京生まれ。東京都立桜町高等学校卒業。
昭和五十一年、ACCで加藤敬郎氏の『俳句入門』及び『研究科』受講。冬浪一寒雷系結社一の会員。冬浪十周年記念合同句集がある。昭和五十六年、ACCで東明雅先生が『連句の理論と実作』の講義を始められると、第一期生として入門し現在にいたる。俳人協会会員および日本植物友の会会員。梅香庵久美子宗匠は蕪風連句の普及のため、毎月第二水曜日に池袋の『滝沢』で、定例の連句会をお世話されているが、広く門戸を開き、気軽な参加を歓迎していられる。
久美子宗匠のご指導およびお捌は、東明雅先生からお習いした式目通りをきっちり踏襲され、そこに描き出される現代風の軽みと格調の高さが魅力である。
久美子宗匠の趣味は、野山を歩いて、花や木や鳥たちを訪ねること。昨年は北海道の利尻島、礼文島に旅行されたり、また、スイスのアルプスに旅行されたときは、百花繚乱のお花畑に感動し、望遠鏡に映る鳥たちの美しさや可愛らしい仕草に、時のたつのを忘れるくらいの満足感を味わったとおっしゃる。
庵号の『梅香庵』の由来は、ご自宅に梅の木が五本あり、毎年順々に花をつける。連句『猫養会』も美しい花が咲き、芳香がさらに広がることを願ってのことという。

賞・梅香庵久美子宗匠

頑張っ！久美子さん

金久保淑子 (猫養会)

久美子さん、立机おめでとうございます。久美子さんはACC・寒雷以来のお仲間で、おだやかな容姿の中に強い個性と知性を兼ね備えていらっしゃる才媛という印象でした。胸を借りるつもりで始めた文音、歌仙の中の「東天紅」の巻は、井波連句大会に於いて富山県連句協会賞をいただき、新人連衆を率いて捌き手としての実力の程をみせられた思いがいたしました。また連句に於ける式目の正確さには感服すると同時に辟易させられる事も多く、文音の付句にクレームの電話がくるのはとビックビックしていたものです。しかし、連句は遊びではなく文芸であるという事に徹していらっしゃる信念は、連句を志す者にとって見習わねばと感じる次第です。この度明雅先生より宗匠の御推挙を受けられたことも、執筆の経験者としての実績、池袋の定例会等を高く評価されての事でございます。梅香庵という、美しく凛とした庵号を戴いた新宗匠久美子さん。今後も芭蕉の残した文芸としての俳諧を守り、その芸術性を高められることを期待いたします。

「今年竹」を胸に

猫養会副会長
秋元 正江

五月十七日はわが猫養門より立机七名文台授与が行われ、まことにめでたいことです。
文台を人は形式だといふかもしれませんが、それは歌舞伎の藝名に似て名前だけでなく名実ともにその位置までですまされたのです。

明雅先生が根津芦丈先生の連句をひろめられたように、明雅先生ご伝授の連句をひろめてゆく義務があるのです。七名どなたも、あり余る才能と実力を兼ね備えていらっしゃいます。季刊連句創刊号に明雅先生は「……私は連句が将来いかに変化・変貌しようとも絶対失ってならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。これを失わず、先師芦丈翁の教えにまかせ、蕉風伊勢派の伝統を守り、その中で真の新しさを模索して行きたいと思う」といっておられます。これを私達はしっかり胸に置いていきたいと思えます。明雅先生の「日に新た日に日に新た今年竹」の発句を胸に置きたいものであります。

文台を頂戴する

梓庵 中川 哲

連句にはじめて接したのは、戦争中、昭和十年代の末でした。たしか小宮豊隆や寺田寅彦などの座談形式による「七部集」の読解で、こんなに面白いものがあったのかと目を開かされる思ひが鮮烈でした。

その後数十年、もうそろそろ分別もついた時分と、おそるおそるACCの教室へ参加させてもらったのが、六十の手習ひとなりました。たまたま本屋で買った「芭蕉の恋句」が私にとっては縁結びの神様でした。

それにしても、運なのか縁なのか、明雅先生にお逢ひしなれば、私と連句はすれ違いはなしたかったように思います。文台をいただいたり、庵号を許されたりして、戸惑っている次第ですが、これからは「捌き」を逃げてばかりはいられないことになるでしょう。むしろ、連句という素晴らしい伝統文芸をつぎの世代に拡げていくという役目を仰せつかったと考えなければいけないのかもしれない。

猫養会の皆さんを力にして、なんとかかよちよち歩いてまいります。「よっ！宗匠」なんて冷かさしないでくださいよ。いままで通りのおつきあいをお願い申しあげます。

輝く七星

猫養会副会長
式田 和子

この度、東明雅先生の積年の御薫陶が実られ、立机の御沙汰となり七人の宗匠の御誕生となりました。先生のお喜びは如何かと存じます。新宗匠方、おめでとうございます。

新宗匠方は、明雅先生御直伝の蕉風をふんまえての御実力十分でいらっしゃいますので、近頃盛になってまいりました「連句」に対しまして、蕉風の本道を着々とお示しになられることと存じており、ご期待申上げております。また、御七方ともお人柄もご立派でいらっしゃいまして、輝く七星とも申せましょう。大人数になりました猫養会の方々にも慕われ且、敬されていらっしゃる方ばかりでいらっしゃいますので、これからも輝いて猫養会の先達として御力をお貸し戴けることと存じ、何よりも嬉しくございます。

どうぞこれからも益々御精進遊ばされ、よりよい猫養会を育て、明雅先生にお喜びいただけますよう、一緒に励んでまいりましょう。ほんとうに、おめでとうございました。

幸せと連句

一穂庵 中島 啓世

この度、思いがけなくも立机の御沙汰、とても、その器でないかと存じつつも、お受けしてしまいました。この上は明雅先生からお習いした蕉風連句を守り次代に伝えたいと存じております。ともすれば、一句ずつがきらびやかな夜のステッキ風や、式目だけに忠実で味のない一巻になりませぬよう、詩情豊かに、ウィットとしをりのある、よく玉のころんだ一巻を目指し、精進してまいりたいと、念じております。

もともと脳細胞とやらが少ないところに、年と共にとんとん減ってまいりますこの日頃、皆様にご迷惑をおかけすることと、存じますので明雅先生をはじめ皆様の御導きのほどを切にお願ひ申し上げます。

松本で明雅先生とお目にかかせていただきましてより十七年、連句の楽しさを知ることが出来ました。この幸せを心から感謝いたしますと共に厚く厚く御礼申し上げます。



翁の励まし

涼月庵 中田あかり

昨年暮、急に思ったって伊賀上野の芭蕉翁の生家を訪れました。

明雅先生から「立机を」のお話をいただいた時、自分の心の中を確かめたかったです。

小春日の門をくぐると、右手に住いがありました。廣目の座敷に次の間、つづく土間には障が並び、その奥が閉鎖の部屋のようなでした。武家らしく、厳しく慎しやかな暮し振りがうかがわれます。此処では家族が仲良く寄り添わなければ一日も暮らせないでしょう。多感な少年時代の翁が眼前に浮びました。翁の俳諧の優しさで近づき難い程の怖さが迫ってきます。この道に手を差し伸べて下さった明雅先生に感謝の気持ちが溢れました。多勢の仲間と巻くひとときの楽しさは、まさに至福です。

師走の旅は師を思い、友を持つ喜びを翁に告げるものでした。険しくても遠くてもこの道を進む覚悟でございます。

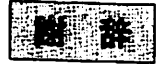


立机の御沙汰に支えられた日々

房連庵 内田 麻子

私的なことに終始いたしますが、平成六年は私にとって辛い年でありました。命を限られた病の入院と退院、通院自宅療養の日々、そして又入院の後、院内感染といわれた十一月の末、明雅先生から頂いた一通の御手紙は、あゝこれにすがって何とかこの辛い日々を乗り切っていけると心より感謝した立机のおすすめでした。もう自由に言葉もない夫に報告をするとき大きくうなずいて、共に喜んでくれました。師走二十日夫は遂に他界いたしました。とも角立机と云う目標があつて、何とか心を立て直し春の日々を迎えております。

長い間御導きを頂いた師恩は言うまでもない事、長年連句と共に御附合いただいた多くの先輩、連衆の皆様は厚く御礼を申し上げ、今後とも変わりなく人生の楽しみとしての連句を巻いていきたい。肩の力を抜いてこの道に心を寄せる方々があれば、何かの御役に立っていきなさいと、心から願っております。



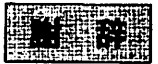
風を探す旅

緑華亭 坂本 孝子

主婦の趣味として身辺の事どもを俳句に詠んでいた私は或る時芭蕉の狂句ごがらしの一卷に誘われてふと連句の窓を覗いて見たのでした。窓の外は森羅万象の織りなす廣大無辺の世界。踏み込めば行き遇う連衆は皆才子才媛ばかりでとても隙には行けないと一度ならず落ち込んだものでした。しかしそこには東明雅先生という光がいつも燦然と輝いていて、覚束ない足下を十数年にわたり前へ前へと導いて来て下さいました。

この度、はからずも立机の御沙汰を賜り誠に有難く、心より感謝申し上げます。不束な身の戸惑うばかりですが、今迄と変らず窓の外の新しい風を探す旅を続けて行きたいものと思っております。

明雅先生には更なる御指導を、又連句同好の皆様には変りなき御交誼御鞭撻を賜りますよう御願い申し上げ御挨拶と致します。



心新たに精進を

梅香庵 副島久美子

この度は東先生より身に余る御推薦を頂き心引き締まる思いでございます。

願みれば十五年前、かねがね芭蕉の作品を読んで連句に憧れを抱いていましたところ、朝日カルチャーで東先生の連句講座が開かれるのを知り、何はさて置いてもと住友ビルの四十八階に通い始めました。

忘れもしません。脇句から一句づつ受講生が付けて行く練習が早速始まったのですが、或る日「四句目あなたの句を付けますのでよろしく」とのお電話があり、キョトンとするやら驚くやら確かそんな気持だったと思います。これが私にとつての連句の出発点でした。

昨年十一月立机推薦のお手紙を頂戴した時は、夢ではないかと暫し茫然となりました。然し、「長年続けて来たのだからこれからは少しでも入門の方のお役に立つ様に」との先生の励ましのお気持と受け取って、立机式を機会に心新たに精進して参りたいと思えます。

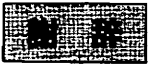
先生始めこれまでお世話下さいました皆さまに心から感謝申し上げます。

平成七年 猫蓑会立机式及び祝宴次第

(敬称略)
進行係 下鉢 清子

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 開会の辞 | 豊田 好敏 |
| 1. 会長挨拶 | 東 明雅 |
| 2. 新宗匠の紹介 | 豊田 好敏 |
| 3. 免状並びに文台の授与 | 会長より一名ずつ授与 |
| | 介添え 式田 和子 |
| 4. 会長への謝辞 | 新宗匠代表、梓庵 中川 哲宗匠 |
| 5. 新宗匠への祝辞 | 杉内 徒司 |
| 6. 同上 | 副会長 式田 和子 |
| 7. 祝吟披露 | 豊田 好敏 |
| 8. 祝電披露 | 上月 淳子 |
| 9. 祝辞 | 来賓 新庄 北陽社 阿部 太 |
| 10. 新宗匠に花束、記念品の贈呈 | 平成7年、伝道書受けた者数名 |
| 11. 会長並びに猫蓑会への謝辞 | 新宗匠代表 一穂庵 中島 啓世宗匠 |
| 12. 記念撮影 | 佛淵 健悟 |
| 休憩 (約20分) | この間に、連句興行用に卓を作る |
| 13. 二十韻又は源心の連句興行開始 | 4時30分終了 |
| 14. 上記作品披露 | 各卓の捌者 |
| 休憩 (約10分) | 舞台及び機数を作る |
| 15. お祝いの長唄 (松の縁) | 岩垂 景翠 |
| | 大窪 瑞枝社中 (三味線) |
| 16. 鳴りもの入りで七名の新宗匠退席 | |
| 17. 閉会の辞 | 佛淵 健悟 |

以上



「一筋の道」

久慈庵 市野沢弘子

二十年前近く中断していた俳句を、再び始めようと決心したのは、三十代も終わろうとする昭和五十四年のことであった。「明大俳句」時代の先輩の紹介で、昭和五十四年九月、創刊間もない「木語」に人会。自分のための、自分の句を目指して、再び試行錯誤が始まった。そして昭和五十六年、念願の連句との出会いとなるACC「連句講座」に入門。東明雅先生の門下生となる。その時から、私の目指す一筋の道は、レールの如く二本となり、そのどちらかの一方が欠けても、私と言う存在は、有りえない様になって行ったのであった。決して特急列車ではなかったけれども、今やっと、一つの駅に辿り着いた気がする。しかし又、次の駅を目指して出発しなければならぬ、俺まず、弛まずを肝に銘じて。

入会して十五年近く、人生の未熟者の私は、明雅先生を始め、連業の方々には、連句は元より、それ以外の面でも、色々御指導いただき、感謝の念でいっぱいでございます。どうぞこれからもよろしく御指導御鞭撻のほどお願い申し上げます。

立机式と文台について

立机式

宗匠から独立を許された者が、その旨を披露する意味で設ける式のこと。師から文台を授けられ、証書が授与されて、専門的職業人(業俳)として認められる。

文台

正式の俳席で、執筆が懐紙を載せるために用いる小さな机。芭蕉の使用したものとして、二見鴻文台・むら尾花文台・鳥羽文台などが伝わっている。文台は俳諧師の間に相伝され『座の文芸』を象徴するものとして尊重されている。起源は連歌時代からで、大きさは必ずしも一定しないが、享徳四年の定めには、左右一尺八寸、幅一尺二寸・高さ三寸五分とある。

東明雅

先生は『ねこみの通信』の中で「昔は俳諧の宗匠となるには、才能とともに非常な努力が必要であった。立机するということは、今日、たとえば相撲取りが大関になる程とは言わぬまでも、それだけに当時の宗匠は権威があり、あこがれの的だったのである」と記されている。(これらの項目は「連句辞典」及び「ねこみの通信」から抜粋)

平成七年立机七宗匠 住所・電話番号一覧

- | | | |
|------------|-------------------------|----------------|
| 梓庵 中川 哲 | 〒108 港区三田四一六一八 | ☎〇三―三四五一―五八六六 |
| 一穂庵 中島 啓世 | 〒251 藤沢市鶴沼松ヶ岡四一十四―十九A22 | ☎〇四六六―二七―三五五六 |
| 涼月庵 中田 あかり | 〒174 板橋区東新町一―四三―十三 | ☎〇三一―三九五八―三九一六 |
| 房連庵 内田 麻子 | 〒216 川崎市宮前区馬絹九九四―十四 | ☎〇四四―八五五―三〇二九 |
| 緑華亭 坂本 孝子 | 〒181 三鷹市大沢五―十六―十七 | ☎〇四二―一三一―四八九〇 |
| 梅香庵 副島 久美子 | 〒184 小金井市中町二―七―十二 | ☎〇四二―三八四―五一〇 |
| 久慈庵 市野沢 弘子 | 〒354 富士見市鶴馬三―二五―九 | ☎〇四九二―一五二―〇四六八 |

連句の世界に遊ぶ

猫菘会推薦 東 明雅先生のご著書

- | | | | |
|----------|--------------------|------|--------|
| 夏 の 日 | 角川書店 | S・47 | 700円 |
| 連 句 入 門 | 中公新書 | S・53 | 560円 |
| 猫 菘 | 永田書房 | S・57 | 2,300円 |
| 連句辞典(共編) | 東京堂出版 | S・61 | 3,605円 |
| 新 炭 俵 | 角川書店 | H・3 | 2,000円 |
| 芭蕉の恋句 | 岩波書店 | H・5 | 1,500円 |
| 芦丈翁俳諧聞書 | 仁デザイン
コミュニケーション | H・6 | 2,000円 |
| 猫菘庵発句集 | 永田書房 | H・6 | 3,000円 |

※夏の日・猫菘・新炭俵は絶版

「ことし竹」平成7年立机文集

平成7年5月17日発行 (非売品)

編集・発行 猫菘会

印刷所(有)一水社 中央区築地
4-6-5